源氏物語巻 三

113
976
3

源語恐草巻之三

目録

蜻蛉の日記
もゝぞの校
若菜上

まくら枕
蜻蛉の日記
同下

ふぢばかま

玉葛は尚侍になりの御宮仕へあるべきよしをとかくすゝめ給へど
玉かづらはいかでいかならむ親めき給ふ源の内大臣さへ打とけまじき
御心ざしの深さに悩みして宮川に人なきまでば帝は御手もかゝりけれ
なれど御姉の弘徽殿の女御秋好む中宮など内心おき給ふが
いかにくるしかりんと思ひ乱れておのれも大宮かくれ給ふなれば書の
喪にあたり見えねど此巻に大宮を玉かつらも御服なりとかけり
又ざれば此巻よりは宰相の中将なり今まではよしかしと思ひて
此宰相はつらき今はさとこなり思ふ一筋をも見えんと思ひて
らにの花のおもしろきを持て玉かづらの御かたへわたりて

大正十五年十二月 花房仙太郎氏寄贈

門 イ 13
號 976
巻 3

ぬしてくれたまへとけるひて源の中将ゆかしう
さうとおぼしうまへの人とうたさうして中納言の
そうぢと云をとげ申くちくいひはぐけてそちらへ
花をみるのてよりさしへて見も中将どのさいあり
とて持て居のふを玉うづゝ何ものをあくるあかへの神を引うと
申して文書

同じ殿の家よりの方へ花樹あり是をめしよりどうを
中納言の人へ玉うづゝ

たづねるふるみき殿の家あるこの紫やかどとあるは
らみとらんの花あり家の姫ぎみとうひあり柏木の

中将も妹とも玉うづゝで胡蝶の巻ふるあどけのうせ
今ハ恋しう悔しう思ひて内大臣の中将殿ふ
柏木の中将

いとせ山姫のうき道とぶ見てとぐこの橋ふ姫こ迷ひ
いとせ山とふへぶ夫婦の写ものやうに学ゆまどけふてもなり
兄弟
とゝのうるにようみあゝいせり紀伊國ふある若不也ぬ
玉のうゝ

迷ひのうるとぶもうで作もせ山たどくもくで渡もふこん
十月ハ玉うゝ内裏へおのすづさ宮ふ是ど吾部郷の家
鮮黒の大将左兵衛督ふどうさ内く絶て文をとせ給ふ

緒断

式大将は只今の春宮の御伯父なる式春宮の朱雀院の御子
なり左兵衛督は式部卿の宮其御子紫の上の御兄なる

真木ずくら

髭黒の大将は石山の観音へ立願おこして無の出ぬとて
玉かづらは蛍兵部卿宮に押て玉かづらへ思ひ懸る源氏
まゝ紀伊方とていふ立後へ始よりと強き掟ふ
ちかひぞうり少今さゝらがめんをさゝがあまだそなたにて
右近ふ玉葛は思ひ知ふ紀伊方うと紀伊方と内大臣は内〻かくも行まつり
内大臣は内〻かくも行まつりとてもあまりてそなたて

脱ひ給ふ髭黒は年三十二なる北の方は式部卿の宮其御娘
紫の上の御姉なり公達も行まつりに出さ初く髭黒玉かづらに
和琴を給ふ御さ宴ふも行〻御ずまつりかど年月相はけふ牧ひ
給ひて現ふもあく成ふ西へ髭黒玉葛ふ和琴を給ふ
此の方物のけはおらぬはずを公ども御うり紀人なまど
大将玉かづらは我物うり・やがて式うへ様えん中よくして
等給へなどくりく御見給へ給を立給ひず・こゝかゝる
何のかまひもあけまゝかゝて行まんが御父式部卿の宮こゝ
かゝと此後ふて主人とは思さゝどかゝ行まんあどけなふ髭黒
かゝて出ふんと日の暮る宴ふ和琴もう紀立なゝゝふ内かゝ

行くけふの後ろ姿をてもさそう後ろ姿の重けまどけどやかう
いとをとげふるあへぶ足後て行くをさらがにてやさくくし姫る
雪を詠めて居ふかう紀を踏の方を行ふひてうで武雪を
分かりん君を更行ふふ出ふくとそけり後ふ武雪にいかで
行むとかふひぶ〳〵石化粧してちふを紀火こうを石よを神ふ
引入て幸紀をめるふふかう方ふよを姫ておのをーがるめくけ
知ろうてふと紀出業義かうにに入て自ーけるをふる大ろうを
ふを一大将かうふよりてをつと知かけふ大将かうにと
行をれふよ神ふる庚目鼻ふ入り精ふくどをうたを庚ふれが
小神もぬぎかく後ぎ後ふう現ふにてかく後ふ後まーう後を

をかの面けまどかの怪のをかぎ行まおふまくかふくをふと
をーう見をるふの方頭ー表注かをーをり苦ーがり後くぎ大将
玉かつ〳〵ををかつう後のでふ注ふり後くり髭黒大将

五

ふをくく庚ふ乳まーー雪をふひをうををつるかくーー紀の神
玉ろうふ髭黒のかう後ふねを行をを思をねが注ーををふつに
をを行ふる表大将玉ふろ〳〵日ろう後ふふの方い物のけ知をう
ろうて知の行まがあーくふりつを物ぶ海ーをるをやかんを
怨しけまがふの方行ふう〳〵の家付後ふず公達をも招へよびて
足ふふ十二三ある姫君ひをうをを行くくる君二人行をーけ新
武新郷の家外の後ひて髭黒をに引をふまを石ひまろう

あつかひ給ふ事ありて若かをを面目あり〳〵あるべし只赤
序のこゝ〳〵ひとしと思ひて傍ふ近ひ侍りて給ふ時しも
小の方を見知ふ数て若かをへば今さら親の序のこゝ立帰むを
公ぐ新しう思ひてもいぐ有まじき海〳〵思ひ乳母をの所者の
中将侍従民部の大夫などは近ひふおのゝていそぐ今日を
限りと思へばさすがに無くこゝろ苦しく泣給ふ姫君の髪をも
をこゝ給へば今のゝて給をもんでゝ。えわかれ海ぞて出ゝ
給ふを母君いろ〳〵にすゝめ給へど出給ふ事のうれしく
給をての程のひのまゝふ書て。のこゝ〳〵て行〳〵の方ふ姫君
今はとてやどりの見ねとも別るゝ程の程よ事をわるる系

母君

別るゝとは思ひ出ゝも何のみよりとゝまるゝ程のそらも
忘られぬ姫君を程程の君とゝのみて式部卿の宮へ
給へば父の宮給うけて髭黒をさんぐにいひのゝしり源氏の
事も何〳〵ぬ後姫君のつゝさ髭黒を賀ふゝて家ゝのく物思ひの世
ゝの中と悲しつゝけ給立給へり。のゝとゝ髭黒物ところゝあひて
式部卿宮へ行ゝ給ふ。ど心地悩ましゝて對面をし給ずず姫君ゝ
遠ゝと給へ給へど出給ず給へば君二人を遣髭黒海
給ふ正月ふ暦ふ有ふ暦ふゝて正月十四日まゝ十六日まゝ
入て給ふ数ゝ人出立古ふ別ふ歌調ひて用書のゝゝを

廻るゆゑ、われを帝と始め奉る女房、又衣冠束帯の玉箒
用ひ給ふ。つきび用へ、寄り帝に目見えあくてかけうぬさと
なるまで式部卿宮を見初めて、
よれを内侍でしても舞ふ。大将の小の方、成あけを帝の
御ふおぼされけう御制
あどてのくさ人びがうれ紫を初めて見ひそえけん
御めしに玉かつら
いのあんこそ、ぬ紫をこそ人のきめれ
めつて譜ふよて用業りのゆりがけふ舞ふ玉者とあるえ
引ふ人源をかやうて見くわうさんとの見人みりぐるもに出
ぬりれうれてのとはどーめり移人見どもすまだれはつてつまぐとを
ぐき
舞あるひふりでうさんと初きう面影ふ見るれて哀し
けまで悲びて玉苔ふ見せてとて右近うこ方まで文つうさう源
かうこれてけどけき袖のまを面ふみるとと人をけふもつぐ
玉うつうをどうる海に立てう物ぐせの行左ふ出うこ人し
玉かけら
あぐえんうう彩の景ふ神ぬまてうこかう人見ものがぐこめ
鴨
源かりのふ方ふ美くけうを出後んぐてたちどあふこくて對面内
うこかんと口をくくふうどけうくふ書て玉うう人源
同じ第十四人見かりのある人うふ極むも

とうさてはうの御子を聟君にとりて御子女はまたとの
親ゆえ父ゆうとくあるべき物語なるべし源氏
物語なるべしとて源の親なるべし源氏
物語のおいたちをつぶやくを玉蔓にくしと仰せられこの
御物語の書せむとて玉うこんうりて大将
巣ごもれて数ゆもはるべぬりけるをいづ方みうのとりあつめ
三年三月ゆ玉ゆづるべきをよろこびゆ

梅うえ

朱雀院の御子の春宮二月ゆ御元服あるべきなれば源の
姫君女御ゆ参らせ給はんとゆ年ごろとて姫君の御宮殿
昔今
の中ゆ御ぐ御用意の薫物とも合せゆ物ゆ香
ぐもとゆ梅ぐ四ぐ弘ゆ給ひて二月づ合せ給へとのゆひて
源も兼和の御ゆまゆ二月の法をいとで仏供ゆ四月ゆ
ゆ三月四ゆ二月十日四ゆ御用意の薫物の
御ゆ花の今日四ゆ殿し四ゆ御ゆ給ゆ物ゆ
三月ゆ中ゆ物ゆ
ゆんとゆ四ゆ四ゆ敷の御ゆ物ゆ
物語の蕚ゆ入面白くゆ
三ぐ御ゆ物ゆ
花の香ゆ物ゆ

侍従五位侍従の君 源中納言

花の枝よりいとゞ匂ひをもむるめる人かとゞめん考とゞつゝえて

ふつゝのぞふひのゝ〳〵の侍ませあふ芝居ものとも考ひて此夫とゞ

数多ゝて試せる考人 兵部卿の宮ふ吾恵を極めみ人とれ文

新院のの黒方 源内の侍従 紫の上れる梅花 ゝふ散里の荷葉

何〳〵れ清方の人れえ中〳〵 何まを面白しと装め侍みを知さ

薫衣香

考紀判者ゝりと嬬ひ考ひ侍ゝり月ゝ出ぬ夏ゝ酒宴始め考ひ

源氏第れ与 兵部卿の宮 紅梅 梅木頭の中将 和琴 夕ぐりの

宰相の中将 横笛 柏木の侍従 梅木の少将 梅ゝ考て梅ゝえ

出て風ふゝどいと面白〳〵 侍ゝ考 新人物ゝ考

ゝと分ぬ方紀 その二 垂侍従 兵部卿宮 つゝだり おゝ

宮 侍ゝ 兵部卿の宮

花の色ゝ考ぬ神 梅ゝて ゝはやまりとゝりやとゞめん

源中納言

ゝゝと古人と侍ぞこゝむ花の弟をさて中ゝる君

中ゝ 木兵少将 ゝ 右ゝ 侍従の中 侍ゝ 姫君 ゝ ぞ内

侍はゝ内の腰 ひゝの秋好む中宮を考ゝ侍ゝり春宮の

侍ゝ役 二月廿日 あまり源の姫君の入内 ふゝ ひて

侍ゝ ゝて 右の大臣内 侍姫 入内 延 源 ゝ ひて

まゝ紀 ゝ 生 侍 ゝ ゝ 侍ゝ ゝて 姫君の

入道左大臣の三の君をまうけたまひて藤宰相の
女房といふ源氏物語の書物どもを殿上書物どもせさせ給ふ紫式部
にも召せ給ふ式部の丞藤原為時が女なり
兵部卿宮の方にも書せ給ふ源氏物語といふ
おのれ中宮の御方にもまいらせ給ふ
御つくりの草紙なりとあまたせて兵部卿の宮わたり給ふ
源氏ぞ世語りて出給ふ
面白く書なり給へるこゝろばへ
なりと語りて五巻兵部卿宮見給ふ
書なりたるこゝろばへ
又まゐりけるおの女房の中に又もよりよりの
おのひとりして侍従の帝内のせ給ふ万葉集延喜の帝の
召せ給ふ古今和歌集をえらばせつゝ源氏をつくりて
御ひとりぞ見給ふ
にと知ぬ
口をしがる
とれてを聞給ふ
見給ふ源氏
とて

はゝをはがせ給ひしかゝる中務の宮といふ宮ぞ侍りける
せんとはかりひて源よりさきよりはかなどせの中ふるかはをもれば
内大臣の御猶つぎまてさきをはしのゝふせんとせのみふみ雪の
御父の内大臣をゝはゝを後ろ殿へとの姫の雲井の雁をとゝ
忘れがたく式部卿宮のゝでよふふの方に物のつゝさをせ給ひ
ものびつく雪ふる夕ぐれの御ふみ給ふ雲井の雁も夕雪
をしでいとゝ思ひよりて弦高内大臣はむすめのゝく
ゝりてよろづふふ思ひ乱れ中務の宮夕雪をは聞ふ
せんとはかりとゝく源氏やあどのゝひて三ゝ給ふ夕雪ゝ
御文あり

はるまてふさふいふ紀世のみふ御ゝをはれぬ人や人ふをとれ
中務の宮ふひかり給ゝ給ゝくのゝふ宮をたゝし給ふを
雪井のゝりふゝめゝ。三給ひて出ゝ
限りとて見まゝ紀をわとゝもやせふあびく紀ゝむ
とゝるとゝ夕ぐれふあやしとゝ給へ

夢のうゝ葉

御妹の姫君の入内はゝ紀のゝどもゝ夕雪ゝ宰相の中将を
物思ひしてあゝめがりたる内大臣をつゝびふ夕雪をはて
給へど出姫の有ゝやゝあけまゝ。まみて出聞ふゝんとゝ給ゝして。

法ひで給ふ。二月廿日内大臣の御祥月なれば、寺へ
参給ふ。女ぐるまも内侍の局同じく乗り給ふ。女ぐるまは内大臣の
まへにて一入うるはしくとゝのへ給ふ。内大臣常に
ひかり機嫌よく御ものゝあひてつれづれ物語り給ふ。卯月十日のほど
内大臣の遊の後の花さかりなるに、物語ども役にて、女ぐるま
内大臣

わが宿の花ゆゑ見そめてまどゐせし
とて物をしろき物にかきて、物語せ給へば、女ぐるまにて
ゆかしうして

ゆかしさに宿とはなれぬ山桜
いつかは見てもなれむとの心なり

内大臣

ゆかしさにたづねてをれば山桜
いつかは見てもなれむとの心なり

内大臣、物語の次でに、源の四位の事、
年ごろ、方々にたづねわびたれば、
いくばくかの日をへだてゝ、
何さにてか侍らじ、花ざかりの日に、遊びをせんとなむ
思ひ給へ立ちてしかども、
思ひ給へ立ちてしかども、
なほ引つくろひて、参内の時、
さん候ら物語を始めとして七八人、迎ひの出衆して、入内大臣
内侍、来りくつろぎて出でゝ、
物語りをよろづうち出でゝ、
などのあひて、座敷へ出、対面し給ふ。げにくちをしき物語少なくて

見わ毎ふ綿り移ふ春の花ちりまさりて根しに花ちの花の立
ぬくまてに咲なにかくるゆのよれ枝がえ行う春をなつめし花
ゆうまに。しつべしとて折ふく笑を移へり時分よくさうしひて
内大臣義のうし葉わと咲しを移へば梅末花の姿さ枝が花を
折てみぐりの葉ふくの葉。梅ぢのうしまのと咲ぐ移ひ
知を鈴ふさ義のうし葉のうしまみて光しを枝をさぐ葉も
あのまん。とふ姫ふ花ふわ花なり夕雪花をみて梅照ひふ
内大臣
常ふかごとかけむ藤わの花まつよう色てうれとられども
みぐうま

歳ふくり藤ふ花まを色ぐきて花の紐とく移ふありうむ
酒宴として姫ぐ梅末葉内しして妹雲ねの屋の四方へ夕雪を
入ぐう年内知を雲しを移ひ。ひ有てかく四舞ふ云移へば
四公ぐしかりで移ろう移むかとり移海ぐくをで云ぐ月
賀義わ春りに帝より更衣へ侍ふ義内侍をつるよ作る
乙女わ巻ふ五節の舞姫ふ殿し惟光ふ姫ふ月ふ年の
雲ふの屋ふ年移わど光ふさあど御ちとてみぐう時
遣ひて公ぐ侍を文ぐうしにふの法い本ぐのぐとく
内大臣の四舞に殿ふひふれが内侍の唯ふを行ぐ見ひけ
雲ふ殿ふ移ひてみぐう

何とかゝるものがたりをうつくしく世ぞ名ちくるふ姫ふけるなる
とをもへばうへ〜内侍

かぎりてもかつたどり〜をもはるかなるかたをいかゝとおもしらるゝ

かくて源氏の姫君の御方にゝぶの方源ひ給ふ事なれど
さすがあがり〜そくのえをひかるゝ様の御母明石の御方をも
御うしろみにそんと思ひて源ふさはしくおぼしよりて
給ふとおぼしてはかりごとさしそえ給へばつゝがなう姫うて
をゝ給へし給ふ姫君春宮へ参り給ふ後或人の目おどろく
ばかりをぜんせ源卑しき給ふ程ど有しの入内の御ぶんと
なりたるこそ世の栄のうへ御覧ゝ方の御明石の御方まゐりて
御ぞうし給ふ事おりゝ栄ゆう源ゝ姫君の入内みゝうりの
袖ぞ見首尾よく潤ひ給ひて姫〜ゝ皇子源氏今年は三十九也
本年は四十の御賀行給へし皇子ゝ公達ゝ給ふ事ども
源の御子ゝ多ゝ御ぶんあて給ふ三十九の秋左上天皇ゝ位
へて院号蒙り給ひて六条院ゝ御ぶんあて給ふ内大臣左大臣
御ぞうし給ふ事ゝ宰相中将ゝ中納言ゝ給ふ
給へり威勢ゝ御ぞうし給ふ御母ゝ御ぞうし給ふ大臣の

行せ給ふ。三条の殿へ小の方を始め奉りて殿ばら多く従ひ
奉る。太政大臣
又、の日は、朱雀院へ行幸。十月廿日あまりに六条院へ
行幸。いのり堂を造り、御願ども果て、行幸
朱雀院を御幸なり。六条院の御母宮いとゆゑ深く御願
立て、後、楽人召し、殿上わらべ舞を御覧ぜらる。若き
御ども、若君十ばかりなる、舞ふよく出でぬるを、帝
御衣をぬがせ給ひて、ひさうの源氏を召しもとめ、紅葉
の賀の巻、海波を舞ふ。ひかる源氏、袖を振り出で、大条院
立ち離れの菊を折りに、神もうけし紅葉をかざしに
折りて、舞ひ終はりて、太政大臣
紫の海波みだりがはしき世の星の光りにまがふる
朱雀院御製
秋をへて時雨降りぬる山里の紅葉ぞ錦
帝御製
千代のゆふ
千代のゆふ古へ聞かぬ紅葉の錦ぞ
とゆゑ深き御願ども、いとうるはしくねびとけ給ひて、六条院の
おとかりびと、唐の楽、高麗の舞、と尽くさせ給へり。

わかな上

朱雀院、女の書き給ふ六条の御方、帝、恨みに堪へ

女房よりの御産の事ふれ申さんとて
御ぐしおろし西山の御寺に引籠り給ひ
給て姫宮達の御方付を形ばかり召具
春宮なり御母姫宮御母北の
御妹源氏の宮と申し奉
四位殿なり御年も十三四ばかりにて
無くなり給ひ母源氏の宮北の
なほ
なほどなく御乳母ばかりにて
おとゝ〳〵うらゝ
易く見て世成育
まりあるを御後にて氏中納言を女三の宮の御うらこんすべき
太政大臣
ものと北の御方とばかりせんとせられしかと若と帝へ
先
年〜世語りの社好む中宮御りまんの御ひいきなる曼の
を新御の宮の御方あまたが御もとくにくもとうけ給ど
実のなり北の方なるべきを
のぞ
御ぐし給へどずまたうるもなく並の人なるゆゑし
ぐしの御方なるべの御頃柏木の中将今の右衛門督なり
御ひいきよう御方の御月夜の尚侍を形ばかり内侍
伝も浅く年もそなはけるを強くし紀やうの光角六条院
新けんもそなるべ御方なりて女三の宮の御ためとの

兄弟に左中弁とりかさねの内のうちの人をもりて内院を領ぜらるる
ゆえ先免角女三の宮ふ内院嘗居せさせ給ふとて御方さはらぬを
内侍のかみ御ゆひふ時せ給ひてけり式部丞ちかとて後朱雀院
内ぐ御方させ給ふ六条院内侍のかみ参り給へば後朱雀院
収めせ給ひてさ御ぐの内侍ぞ参りて女三の宮取けたる
ようほのめかし給へば公の御ようぶ限りの御様にはかり御心
べけれども行すえ思ひ給へ給へ御ぐ行くむと御引きひて
御り給ひぬ紫のうえも御心定めをかりてかの女房へど取ぞ後の
御院をとこにひけりかとこを分けて出みしうぶ出をも誘ひく
おぼさるねば源の御心を同ぶうぶ行の御をとをくて御ひをを源氏をふたを

出るをなりひて御心に御ぐさん源の内侍公御ひ御をを参る海じ
ゆれど紫のうえより御玉をふべしと条出ぶぐ強をべきさをと
なく御ば源の中宮御方にて御ぐ御ひ行のこころを
玉行くむ女三の宮の姫まいくさ思ひ内侍母女帝のゆうをに
誘ひうぐ御ぐさぶ御妻人て行ん人と申ぐ人女三の内侍母と
紫のうえの内侍父式部卿の宮とい内侍ようなる母をみな
ての女三と紫のうえとおけること御まおいくの後へり御の内をりい
源氏をこにて五ぶ御をかり参るのにを行ぐ朱雀院遊
ぐくけるの御せて後の後ふの方まぐ慎げにをはるぐふしぐ
なくい世るの人よ行うと洋判せられ家たあ御て御ゆあ

かるべし只物をおしく引まはしけるをやめんと思ひ給へ年かへり姫。
君もしは六条院四十に成り給へば御賀あるべき年なるを度々絶せし。
御賀をば子どもまうけの鞍を取り或は帝より臣下の御賀を挿し
ひさしく其後何事も夫の格別御出入ありてのちよかりし宴のうち
義らは何事ぞ様柱の巻に顕はるの右大将の北の方に成給ひし
玉かつらの内侍も源の御巻若子引連ずして正月廿三日子の日に
よろこびて若菜の何つゞきの義源にまいらんとて御わか様へうらかふ
のぞ様へとゝのふ南殿に帳わさの屏風九帳書棚を始て道具ども
結部の座をへの楽ども来らず哉調へてまつり振舞ものして楽人ども
舞をまはせ引出物をとらせなり玉葛は右の通りに用意し

六条院へ参り来し源を振舞給へり御歌の時玉かつら
若菜まいらせん時にべの小松を引つれてかうのまゝを取るかへり
とゆの人へかへ人が御歌へし
小松原末の齢に引かれてや野辺の若菜も年を摘べき
此なごりを巻の名とせりかくて二月十日余りに女三の宮
六条院へ見参り給ふ新殿をかひて源の御座所にしても
給ひし朝何りぞそれ御帰りかつ殊に女三の宮は十四なり
御年よりもちいさく幼くも物さびしくおもひきかへして何の姿の
やうすの三日の夜どもの我御臥で源見侍りける給ふ紫のうへも
心の内にはいかにさびしく物おもひにかかるを歎かせ給ひしなるまでどもやて

かくして源の小袖に白ひきをとぢさせなどよろづ心まで入給ひ
給ひしも物ぎもりげなる代理りと源は恥しう覚ゆならんば
眼りよせて紫のうへ
目に近くうつりし物は世の中を行末遠くたのみけるかな
古事ながらかさせ給ふを源涙ぐみして
命こそたのもしたゞめ定めなきよの春なりぬ中ぬちぞのを
などの事ひて源女三へもやくもえわたりなりけるがかくはく
かけしかたを召わたりなんとすゝめ給ひて源出給ふ頃紫のうへ
機嫌よく女房達と物語りなどなし給ふ古川のかうくてしも
女三の宮の御まへ給ふるをとよみけるを思ひて姉ましげに

かゝるをばなく御ざと思して源の年頃の女へは珍しげなくて
源淋しさのまゝに此家のわたりなひて慰めん為を
わたりの〳〵せねばや女達よして遊ばんと物のみよ人々の
妙とかゝるよなどくれなゐを中務の中将などいふ女房達
目始めて錦の御思ひや事るといふ御さの淋しく
御物語りしても彼須磨の古近の時を思し出て古事を
姫し思ひかるゝすかゝと家おを万づ心にあぐさめ給へど
なやくも寝めくれならぬを御例にかけゝる人のいふに思さんと
昔らが紀も心なうぬさへくるしかく思ひ乱れ給ふゆへにや
源の御夢に女三の宮へは目覚て暁がたにかへり給ひて

鈴をまゐらせたりしかばかのつるのもとにいまさしつゝ
のりをもとりてとくゝ鈴をふりゝ森へしてえしゝく経をよみたりて
戸をひらぬまでおのれもひとりとてそうへ物わらしてまく
出こぬゆへなりまことにとがにもほゞとひゝく事よ入て姫をつれ
帝のもとへつきゝ給へとなりしかばかうつゝ鈴をふりたし
かれどもさもあらばこそかつめをぐひをみるものの紫のようふまん
人なりとおのれをひとりぐみの夜言洞ひてこそ東の時雨方に
星をみて夜もすがら後朝の文をとりてこそ女をとこの
なりこそ文のあるさまなどいはゞ浦さんするあり昔の舞入を
さしよせ給ひ又三日めにをはりの後朝の文をはりとこゝみや

源女三の宮人のこゝろのめをはりのつのみあどはくろひてをき
紙ふ六条院
中ゐを攘るほどのあれどもなれるく今新の法華
市ゝ人しし女三の宮
よろ紙くてうの宮ふぞさゝえぬべき風ふ海ふまの法華
四まをとゝふかれば式年法みてふのくふあゝきのありと仏ひ
ぶひをゝきほどく市法人行ふふ付てを紫のようてよろぶ番用
紙ふ又ふ家ようく様ぐてしゆありと源の市自像あり
朱雀院西山の西寺ふ移ひみをて女三の宮の市ふと紙
寺のゝ見ってをとて紫のようにふ文四りの朱雀院

そのさにはし此世に残る事もなく入山道の前ぐしなりぬれ
御よろこびのかぎりと思ひけれどもさすがに心ぐるしく斟酌し給ふべき
おもひなし給ひけるとぞ紫のうへ
そむくよのうしろめたくおぼしけるが残し給ひて明けくれ
のこして御手に移ひなへば今はと女三宮遊ばせのみ極らく
わたり給ふ花の宴の巻に源氏逢そめ給ひし朧月夜の尚侍は
二条右大臣といふ御父右大臣の家へ帰り給ふに源のあまたれ
あの後まし御中なりぬ今でもひ逢て須磨のさすらひの
咎めも給はりくてむかし御後なとをせし中納言と以前の
河のそれを出家ありて念仏にうちすみて後にて二条へおはりて

さほしたのもへば内侍も朱雀院の御事あくうしろめたく
まとおもひなかひかぎりはそもとより源にひ給て内裏まゐりば
西の京にもえまて給し給ふて逢ひ給へり十四年の程隔てあ
御對面なければ珍しさをおもやまけりの後の若菜の巻より
十二にて春宮へまゐり給ひし源の姫君此御上よりまゐりて
成るふわざと御年をゆり給ひたる逢しもまづなるせ時にいつさ
よありは繰りいとなりて内裏に居給ひしは此姫君を源の
御母の住給ひし所なりとて則桐壺に住ませゆへ桐壺の
御息所といふ御淑景舎につきて六条院に生れ女三の宮の住給ふ
新殿と姉の御に移へつへとふ入女三の宮一かねに右御姫の

陽息不を行せ給ひ給ふ女院ふ敬ひて小親達の主殿うら
を見び紫の上の四の丁へ渡ふ給ふ御ふるまいはかりでけおけまがあるへ
遠目紫のうへわうを給ふ御いでに女三の宮にを對面せんと
源ふ聞ゆへ給ふ御ふるまひ
ようびよくおはへと宮ふ四の丁ふ不ふ実の四母ようを紫のうへを
むつまじうもてなふ四物語ともをかりこまひて中納言を
四て女三ふ對面し給ふ女三の四めとを古出て朱雀院より
ふて四ふ給ひせたるもし給ふいよく恥ろうふ思ひ給へねども
盤さ多知まび行のづうへおらたるふ多かりん古様の時も
四物ひび。用ようよりるふ御ひ給ふ女三
四の陽ふ四ふはくべさ。ひいふ繍を給ふ
よ紀人成と和とけ給へりの四て後の再くふ成を高かり和ひ
出ひの四物びなどーふひの四中ふ和ふ紫のうへを
源の陽子のやーにて生ふ給ふゆへ十月ふ源の四賀をせ給ふ
ふの四物びなどにりて女ざう見物未青海波を舞へり十二月
廿日ふ秋ふのむ中宮ふ出させひて見も四ふ多ふ見ひび
陽賀をせさ給ふふ帝ふりを賀茂中納言ふ
古大将ふなりさせひて四名代ふ女ざりに作給ふ。年四へりぬ
陽息不の陽産を産づさ給ふ。四月一日ふり陽法を不行ふ。
ひべなり。祝ーの四行講数ふ二月ふり四気色ふりて悩ま

陰陽師に見せ給へば、此石の出る方の住居ふ
乾の町ふ見るに、陰陽師申せば、此石の所母の居給へる所のうらにて
うまれ生れ給ひ、ゆゑ入道の上れ玉ひやうに、めしぼき
事なれど、老のくりかへしにて、ふ語りゆかうにて、ふ語りて、
此石ひろひ、ど三月十日、まつに陰陽師延生なれば
母ふまに、誰こそ姫こそ、此石の住ふ所ふ、陰陽師
にて、陰陽師の儀式をいでゐまだ、病屋へ、ゆりふ、常世宮を
姫君、文のことより、陰陽師、姫ふ、此石ふ入道
のこの事を、待へ、笑て、ゆとうれこそ、ゆまさを
此の世の界、ふ、ゆく行離れと思ひ、家をでて、寺にあし

田舎ふ、寺領ふ、播磨の国の、ゆく、形ふ、海さ、山はるみ
義ふ、て、姫の石の出る方と、尾張へ、ふ、て、ゆ、ふ、
姫君、春宮へ、年の、ゆめて、若宮、生れ、ゆ、ふ、
ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、
母ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、
て、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、
あり、山の、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、
ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、
ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、
ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、ゆ、ふ、

姫君国母と成給ひて移ひ給ふ満ちて日ふ頼をほどに紀伊の
今の母の上のみまく恋しき遠ふ西の十万億の国を隔たる
九品の上の国に疑ひなく成ぬべむ蓮を待つども
水を清き山の末にて新しく入道
光明遍照十方世界念仏衆生攝取不捨
金剛の台に自ら立ちたまふ
今の世の人は唯無常を厭ひて菩提の
方に赴かず老法師が
功徳を問ふ人世の業にしたがひて後世を
思ふ者の形の所に
俳諧
無文の和歌にて
せさせたまひ給ふ
拾ひ集めを
数ふ
形文
わすれ
身を
入道の
頼をみてんとて
弥陀
源氏

公ざーを始ろうに見ひかふ氏月氏の徳の侍母あうし付
きまして付ーひかへどおとを傳なのくへとたてーを浮など
笠をかへが行ーの四方海ちとふようびどんせろふあの身ふ
せさ駿かへあまりたこづうーれどをもかへ月を和ー紀徳
念はよせをかへどを行ー給へがそれをそこのためにはけど
唯四月家を見ふ四へふちを彩どのかふようびたーひかへが
源の四公ざーは年月ふをへて海さ彩も理の左月安三の高を
たうとの人めにおもてのづさをかやーれまでにたろざーの
かくを月をえねと例の世界のへのにあまだあこれのを
柳木の古来つの猪笠をてのづけあくとをぬーとにうーろこん

とをふ分のづわさめをたをくのーんみをを小侍法を
考ふ家の四うへをのう彩安三の高の侍乳母とかーを来の
見れをてのはーのーれり氏小侍法の高れめのとの姫也小侍法が
るにの柳木の色のとのをど彩月で考ふ行通ひ柳木をを
ちてーれゆへ安三の侍事も彩るのをとく彩りたさ彩出をを
彩り也家ふ和をーろを日侍月の高部郡の高古春門法
六条院へ年りをひて寝殿の左にてへ鞠蹴が
さをて四法へ芸のう極風妙へ鞠の数行づをて和りろ
それが公郷ふ月どををさへ彩月ふ彩て年多へと源の多へが
ををりを柳木を和りて芸の法ふ侍へふ安三の高れ四をを

ぜんぜんあの五月雨のあまだれ
にて四篇のすきまげ多くにうつる月の几帳もたどけあく
押籠のたるふちいさき紀の猫のたふれたるをみかりたき
紀の猫入来てくひのくるふ犬猫(噬)て四猫の侍篇のかへるひ
出る鶯のひゝ鶯ぶたるを網ゆて四篇を引ひけてれいくく
騒しきをすまどりして侍篇の四つ紀よをつぶ女三も
騒るきて侍ふこをひて居ひを古歌猫を紀く又をる
女房四篇の四つをと又ろけ四こ四くくてこらぶひ
ひくくぶ騒るきて侍篇を紀ろ四をより猫ハいとで四ひ
侍く故て小侍従ろくく又ををくくてをとをのをくくてをを

紀せをくく古歌智

よくたくて紀くぬ女あげきふ出られども名猫こひきを紀の名侍
と紀ぬをと小侍従ハ四ろ紀く又ろひくと四ひをよくぶ四
をのををと紀ひて女三ふこをせをれハ紀ろ紀ハ女
四出て侍新歌をて侍源のをの侍ハいでをとふ女房にこく
女とのをふよこを射大将を又くれかぶ四くるをとあをくと
源よ大将の侍を紀ろ紀ろ侍ろんと侍ろをを紀ろ紀ぶ
ををををげ紀ろ四紀ぶこをを猫ぬ四ハ小侍従

今女よをくを出でぶぶくくをよぶぬ猫よをくを四紀と
四ひをを紀をををと侍をこをり

わりなし

柏木の子どもの猫は小侍従の所にて殺さんとす見く
どもつまこのもいふがとは侍らう見ひかりて三月の末ま大条院
にて小弓とくくに射させて四位侍従例の夕雾柏木と乗りあふ
所に猫の人ちまぬ見ひけ〳〵何まだかう猫ひも乱ふひ〳〵とも
侍まだなりめめ〳〵ちをみざりめ〳〵知るとの見ばく〳〵も
ちさこのもちぬべ〳〵と名ぶまふ柏木の源を見まる
侍もなりちく知〳〵てかるべきまかいかるべきの海ぶさ
まと見ひうつせど見ひ焼てかせてかの見て〳〵猫をねすま

こて猫ちさ飼めふせんと見てど殺れさく見ちにかのまり
げりけまちこまこまを女三の宮侍従見なりられ御させ給へふ
所もかんと見ひてまこまふ乗りて見まちた内書の猫の
ちこ〳〵を殺代こまめもかこせふ代と何〳〵見てあまこを
見るにまで見ひ出〳〵れて女三の宮の西の方ふ参給ふ
〳〵猫ちここのみうの見〳〵見えと行こと参〳〵たまへが
生〳〵を玉ひてこの猫侍従こようにて侍息所の西方
より女三の宮へ見ひあひられがやごて東宮へまいりこりと
柏木の西方と筆〳〵乗給ひ猫の有を見つけ給と
かりあくてかこあでこみこれを侍従でて行まごこくこ

うべをとりの猫でも見ふ芳ばとの孫うんまで作べ
ちまで成ばもづ新の猫ゝんと養て高うゝよび抜ゝも
ゆゝう近く少世量人給日拾ゝ形ひゝ人いとよくゝづゝて
ゝもすまで小神の孫よまつ目てゝ婦むゝ目ゝ成ゝと
ゆゝゆくゝゝ人てゝと見ふゝてゝ形ゝめて手婦ゝ寄ゝゝゝ
形りくゝと明けゝゝさ拾てゆゝゝ海ゝ抜未

高尾ゝ人ゝゝゝゝゝゝ形ゝゝゝ世ゝ上行ゝて明ゝ形ゝん
見ゝむゝ形ゝりにやと情ふ入て形ゝめ居ゝ了無ゝの
古大将の小の方ふ玉ゝゝゝゝの尚結ゝゝ了ゝで色の北の方ゝ
序ゝゝゝ結抜の君ゝ抜ゝ式部々の家ゝ序ゝゝゝ

ゝて源の序光氏の高成卿の高成聟に高孫ゝ了ゝ母君ゝ
年月にゝゝ物ゝけ言ゝゝて怪ゝ紀ゝゝものゝ姫ゝてゝゝゝ
序祖母大高ゝゝゝゝさゝゝ入ゝゝ了月の帝序位ゝ序ゝ序
抜ひて今年十八年にゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
位ゝ去て公安ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ縁ゝ形りゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝれゝ春宮ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ今ゝゝの政ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

給り居たる七年以後の出仕を止めて冠を先祖の墓にかけ
隠居したる形迹だにかくれなんと何のをしかるべきとの考へ
ありてとかくの後に後白河の大臣といふより藤原の四姉
今の帝に内侍母なる人で藤原の右大将右大臣とかいひて
政治をかの帝に内侍母に申しつけ給へば内侍伝へつせ給へ
付てもいとく内侍殿見参に見しに右大臣源の四姫相国の女房の
内侍殿に一の宮春宮に奉せかふ女房右大将なるもしぶ
右大将に源の四位殿さるかの付てもの仕者の
頼とも侍らんと紀伊殿に給へど神の内侍殿言ひ出すべくして
十月廿日に内侍殿の女房の名の四方母の尼君殿と

引つれて行き給ふ時で神の祝がせかりんすもよつくさせ
給へり何にも尼君殿でさんとひぐ子云て世の中の人
見をとる事にてかをきくつひ成出んと思へしかの
柳末の内侍殿の近の君双六の点目にも尼君殿とぞ云ひ
あひ内侍朱雀院の西山の内侍寺に四条ひつとめてわ〻せ
給へど女三の宮の四位殿に指ず帝に参りあひて二品の
内侍伝へ内侍殿参せめ〻源の四姫相国の女房の
四子達何まこと屋なりの内春宮の内侍殿次の姫宮殿
紫の上の四位殿にみてそなてかづけて賜ふ〻みまへ
若ち新里と見殘義と給ひて夕ぎりの四子惟光が娘の

もゝに出さゝしを味ひて、かづさの氏見ちる里を久ぶりの
序母分のみ子あへと源のあひ〜ゆへ氏うと久方のもてゝ紀
なり朱雀院の御遍世の頃彼方〜に知りめせど女三
の宮ふかくてゝび御対面ありたき見の氏世を離るゝ時も
難ふみ方んと考ふの方ふよ〜源侍へ仕へ給ひて幸生い
方十に深させあへば御誓ふる葉をなりあんふ方よせて
御對面あ〜せもま〜ひと思ひて毛用意どもせ用意給ふ
孫なふ葉を習ふせ御目ふるけんとて召〜れよ上をもて
習のせあへ女三の宮いもとより琴のもと浅ふ弾あふ今も
源の中の〜ふまもせば〜よく〜よく弾せあんの中對面ありぬ

給ふ〜てゆんと山の帝宮より源まみひて、もて教ゆ物ふ
て海を見ゆへむづうしうて紫のうたも出給の女御にもて〜へ
ぞ見まーかどのあつまれ〜ぐと思て氏法の御方かるて
を〜へ給へ方の年の〜へ月にの御賀をすぐさ給まぐ
それより海へよろぐの物の音たはりせて武の女楽を
あへて紫ようを女三の宮ふ琴の中ふ〜ふまん〜せまもあひ
御方ぐ〜もはどひあひて中ふ〜ふ〜も来りわ氏紫のうふ
和琴琴箱の女御に第ふ方と女三の宮ふ琴箱の中方に
琵琶ふの物子ありせみの音新氏ふんとて玉のの〜の
服の三郎君笙ふ姫へ方の中の子を郎君横笛也久方より

大将をはじめて箏の緒を張しづめさせ給へりしかども
されそれよりのちしらべにぞ合せ給ふなどかきを
しろしめさざりけれは拍子合てさやうしふし給ふ深き時に付
させ給へり女三の宮は人並よりちいさくうつくしげにて唯
御衣ばかりのやうにこそ見ゆれ白ひやうなるかみこそかくれたまへり二月
中の十日ばかりの青柳のしだりはじめたらん心ち
して鶯の羽風にも乱れぬべく。御衣には桜のなほしに女御の君は
同じやうなるつくりながら今少し白ひくはへてあてに
なまめいてよく咲こぼれたる藤の花を見たる心ちす
紫の上は御ぐしのたまれるほど多くあやさはほど

にてやうだいあてなまめかしく柳よりも白ひかぎりなる心ちして
花といはゞ桜にたとへても猶すぐれて見え給へるけはひ
明石の君はおされぬべきを心ばへありてかしこく
嗜ありて其さましてなにとなうちつくろひ高麗の錦の
縁とりたる茵にもまともすゑて琵琶を打置て
持ちひなる撥音ありさまよりも見まさりてをかしげなり皐月まつ
花橘の心地しけり女御は箏の琴を紫の上
より聞えし給へ紫の上は膝あれ和琴は源氏の
ひとおもしろう此箏のこゑすぐれてかきならすひの緒くみ
ぜんと思ひしかどおもしろさに大将も更やりとて御拍子

やまぬ紫の上の女三の宮ふ所和琴ひきとゝえあひて吹方ふ
ゆ〻しかりし新日源の中のひさ将どもの事共宣ひ出て
紫の上の和琴出さたりと参みて弾ちけ四はつうひも
中に新侍従びわをすゝてのどかにさゆ四さ面
なりしかやうにたゝひぬるの命こそかさねとと源氏仰まく
ちく呂に成ふまてたゝの世もふ殿方ゝ恋ゝ年
なり初ごゝ世界多くて物のみひてきてのよ多の序に
源の侍従で方原四かゝ中ゝ知ぞえ新とかゝ多ひて
六条のこゝに原ゝそうつゝ紀伊守の呂ひ出ゝれゝ人ゝえ
みて多新紀取章にて姉ゝ中ゝ隔多く成にゝなど

四ゝ中の女三の宮琴をよくひきまひ侍ひけんとて源氏
女三ゝ中ゝ中の女ゝ中を給よゝ紫の上侍我恋ゝ若ゝ世
女ゝ人ゝ源氏ゝ中ゝ侍ひて四ゝ侍ゝ中ゝ
まゝゝに強く多新ゝ四ゝ侍ゝ中ゝ侍ゝ中ゝ
べき侍年新多ゝ四ゝ侍ゝ中ゝ侍ゝ中ゝ
侍新加持せ多勢ゝ中ゝ氏ゝ中ゝ侍ゝ中ゝ
同ゝ中ゝ侍ゝ二月ゝ中ゝ多ゝ侍ゝ中ゝ
四月新ゝ氏ゝ人ゝ中ゝ侍ゝ中ゝ侍ゝ中ゝ
大将ゝ殿ゝ中ゝ侍ゝ中ゝ侍ゝ中ゝ
侍ゝ中ゝ侍ゝ中ゝ侍ゝ中ゝ侍ゝ中ゝ

巻より氏子葉のもとゞめをの帝釈の御ゆ今の強ふあるせあひて
冷泉院とゝ左大臣より紫のうへの母やこゝろうつくしを
教て養はせんとてもとの御息二条院へ御ゆ参せ給ひ
ものを数ちゝび相手の女房の式部中納言ふ物ゆ今の
帝はゝ母の御方なるゆえ親しく思さるゝ時の人なるゆ身の
琴
程なのよく物ふ分てもゆ叶ぬ事なれ恨ひ
侍て女三の宮北御方の女をあげ奉り給ひけるゆ
人々ゆ思ふ事ふて物ふ思ふ御ふ小侍従を
よびて心ゆ思ふ事のを物ふ思ふ御ふ思ふ事を
それゆゆ女三の御方の底ゆ思ふ事ゆ今の

紫のうへの御心に分て源を二条院ふ御ゆ思ふ
ひまなりとゆ思ふ事ゆ思ふ御ふ思ふ
ゆ思ふ事ゆ思ふ御ふ思ふ
ゆ思ふ事ゆ思ふ御ふ思ふ
見物の用意して出まゐ人ゆ思ふ御ふ思ふ
思ひ相手へ方ゆ思ふ御ふ思ふ
小侍従斗ひて九帳の陰ふ寄ゆ思ふ御ふ思ふ
御ゆ思ふ事ゆ思ふ御ふ思ふ
それが消ゆ思ふ御ふ思ふ
ゆのやうに流ゆ思ふ御ふ思ふ

氏年月号ハ後ろ五方ほど物の間ふて序篇ゆきたうまに
序めてちやうんーちやうごとも四うつぶけて相手ど霧ノ返ふも
たあうぐ、そでやいくとして引たてたる四ぐ〳〵たけ手ばかく
までとハ号ハぐうーふをもうせぬ歌ハ去ぐ四ふあけゆけばころ
なーぐ、こそふるとて柏木の号そんのかこ
一本中納言
ふてれ、こそもたれぬ四くまふ八ぐくれ霧ノ四る神ふる
四くんとふるにおしれぐさめ移ひて女三
四ぐれの空ふう紅葉ハ消えぬん霧ノけはとてもやしべく
四ノ木ハ物ノあひてもいうらぐれあやまちをうつるらくちして
つぐ〳〵れがめぐちれう女三の宮ハ只今人の見すしやに移ち
恐しくれば四ぐさ有ふおだよ元ふ安ぐあやまちげふたち移へど源
氏のせあひて紫のうへ四ふちに去へ又四ノれんと四ふを或ハ
四れひよわうりあふを又ふふもハとぐ四つぐまて女三ハとうとうもの
のあうぐ柏木ハ本れる紅ちもて記ノ四ノ常し俺ふ宮ハの方
女二の宮ととあつるも同じ四ノ四ノれまど者見ふ歌ちれと見ひて柏木
ふうぐ四ノ紅葉と何ハふひうひうんあいむつまれかぐれまを
四ふ四ノ人ふの元氏歌葉ハ宮といふ源ハ女三の宮ハ四れ四ふ
四ふ見ふひて二条院へ参へくもそ移ノあ四ノ紫ふうく
移〳〵ふとて〳〵まりけまど序ふもそれて四ふ紅たまふ
ふのふぐふもふあ四ぬふ二条院ハ人ふうの大将まて〳〵

主殿ぞ法のくちるをとまづくし源入せあひてちりぬる物の
けのちるぞ形なんかくふさるそとぞめあひて新たを立
そへ弱者をたてまつりて初せあべ物の悩ちんさえ
わるべふ物りむさえのうへいかを出るり物けふを
付まきるわるべ源を時をりてをてよりをつひ中宮の
内うしろをを法ををく新しあべ時れどやをを
法まだ紫のをとの四物のうに新をを何をを法まを
みべいをつをさ形り氏人を悩しと思ひをたるふをし
源ふうををいをん寺あかく迎ををいふををばをのひ
給ふ系もをく六条のをや法ふの死重ををゆまだ仏と

うをゆをう思人紫のうへ物しへどち出をみひてをべて法
れろをんとををくのをへべをやをにして戒をを法ける
紫ををうて戒を極けをりみ紫のをへ悩むべをを方にを
行ねど源のをえべをくに思ひひをくふをを
をとをばしてむりに内弾をどをりみゆへみや六月
みをてをぬくれをを行べををみ女三の宮を五月のすをより
物ををりめををを方べ物ふ悩をみをと笑みをまを
六条へ物をを法へん寺法ふ紫のうへを地の蓮の物
よげ形るをを見出てれをを源を絶ドてかくて見をる

ちそなの御ちはは殿あまさへ仕けるを御はせぎるまゝと仰せ
給へば紫のうへ
消なゝ(きえ)ぬるほどやの姫ぐさたまさうにまちたの森のかるを汁を
とれ給へば源
なりはひもむ世あまでも蓬紫の思ふる森の御へぐつか
さて女三の宮へ切り給ひしを初末よりあはれとかさて
小侍殿うさ海で御とせ給ひ女三の宮ふこせ
まるを源氏はせ給ひ小侍従に立て次の夜へ出る宮の御を
梱
ちと秋の下に御へて隠し(かくし)給へる宮の懐妊(くわいにん)の
侍りあまが立つひ後ちにも侍りぬ夕うげふ後ふぐ

侍六条院へ御ゝんとれ給へば女三の宮月待てもとれ給へ
をとの御へ宮(き)たもはんと思ふみやとて宮の源さま
らせ給ふ式部の古宮(やみ)文宮(やみ)ふるたどくし月待て御へ宮わが
せこ宮(き)ふ御もはんとの御宮の御なりめて源の新うげふ
御ゝんと思ひてとく行きふ扇を置わとれさせ給ひて
とくかこ内侍ずれとて宮ちと秋を引行けの御へ源さどれ
紙ふかさたる文行の宮て月なの御へ初末の宮也年月御を
宮ぐ紀宮ちに遂宮て思ふ侍(き)ぬ御へ宮ゝ成
ちまゝとかさたる文なり内かぐ(境)ふれとちてまゝる人を
見ふふぐの文みてこそ行ゝめと行の御も侍ぐ小侍従を

きれいの女の紙のようなる手で強つぶきて世之介にまうちぐ
れる手行り。花のみの女いりぐぜさ弱みとせぜんとう孫の
中ふ入しゝ。ご意見（ヤウと）て元後（そご）ろぎりけるとれのふ行て見るふ
女形けるが消まとりつぐきかこを彩く。行きれてものも
いそれど女三人あで西波のこそぐつ源されどよりかく孫さて
何ゝむとかりて思ひ。かどくく發狂とあしさ女おしを彩く
文ぐやのくとどうるるこあ女ぐ分うけむこのひよんこ
安ゝんと思ひるるぞかし情姫をかるゆくなりさても
氏人をばりのいどもてふさん。うゝろめこ紀子をかくるあぐふ
元ぐづこかを氏ろをこみるせんを浄姫（めど）の子彩まで無みて

無を法（ちく）ぐだてくあるべし。家（れ）文章より市目を如ぞ。義意を
物し冷る邪院出さ。さ彩移ふこれもるひふこと行きあ
れどさ海ぐ彩ぞひ乳まて物見後かること
ふて行まと物事へひひや見け彩だ彩どろきあどくて
彩（あい）こそ考のるり彩ぐ。ふぞさ彩きるの行ゝんやと行き
まゝ女三の元彩清ぞとり彩ぐ彩立てさ小思ひ
さ海ぐ彩く今よりの源ふ彩ぐるみこまむと意（おもゝろ）ゝう
物ゝゝ。せん方ふるさ彩ちし。ける源は物ぐろ見表の内行を
意（ゆゑ）ぐ。氏ぐろ。ゝうろめこ紀筋彩ゝ紀物ふ思ゝ彩ふ人
尾よ彩ふと笑せ彩ひて尾の物言来ぞど指ゝて行ゝこ

移りぬるかの行ひ給へる朱雀院の御賀二月のと定めらる
るに、紫のうへ煩ひ給ひて六月まで延ぬ六月ばかりの女三の宮
悩ましう御気色さへ今年十二月ばかりなやましうなりて来年へ
延びぬべきさまにもあるに、移ろひ給ふ試の楽を六条院にてせさせ給ふ
御賀なりの度の出し物未だ始まらぬ間に、何事ぞのあひ合はざるか
ばかりなるべきにもあらぬを、婦人不審なりと思ひ給へるを、
心ばせ深くなんと思ひ給へる御心ばへ、世の人もいとあはれ
なりけりと思ひ給へるを、又打ち続きて、
母宮、大臣、父君などの隠れ給ひぬるを見給へるに、
憂きものかかるよりまさりぬかと、ぜひくし思ひとゞまり給へる

免てはかりの御試しの楽などもてはやされ給ふべきの時
深きなげきに沈み給へる御様にあやぶみ思ひ給へるに
よりて、世と共に思ひ絶えしらで、俗にしてよりは世を
移ろへる方にて、初めつかたは、ものさまかはりて、毎
日の方にのみ新たなるを、京の方へはとゞまりて、春はせさせ給ふべき
朱雀院の御賀の年は、かくれ給ひけり。式部にも朱雀院の
御賀にと、菜をなむとのたまへるゆへ、菜とは人の

早稲田大学図書館
011888008499